# 天理教と現代社会の生死観：老い

おやさと研究所教授
幡鎌　一弘　*Kazuhiro Hatakama*

「老い」、すなわち老人問題あるいは高齢化社会の問題は、1970年代から天理教社会福祉研究会（社会福祉課）が中心に取り組み、教会での実践が紹介されたり、教理的な理解が深められたりしてきた。講演では、すでにかなり踏み込んだ議論を展開している先行研究をまとめつつ、もう少し世界的な動向に視野を広げてみたらどうかと提案してみた。見直したい意見もあるが、社会福祉研究会などで30年近くも多様な意見が述べられているにもかかわらず、なかなか日の目を見ることがないのはなぜなのだろうかとの思いを持った。

なにより、21世紀の「老い」の様相は、「おふでさき」「おさしづ」の明治時代、『天理教教典』の編まれた戦後直後とあまりに異なっていて、歴史的に一定の制約を受けた言葉のなかから何を普遍的な教えとして読み出すのか、という難しさもあわせて痛感した。

紙面も限られているので、ここでは、当日の話題のうち原典に関係する内容を中心に紹介して、講座の報告に代えたい。

『天理教教典』では、老いそのものは取り上げられてはいない。しいていえば、出直しに関する記述の「身上を返すことを、出直と仰せられる。それは、古い着物を脱いで、新しい着物と着かえるようなもので」（p.70）の「古い着物」がそれに該当するだろう。しかし、「古い着物」そのものの説明はなく、あくまでも出直しの説明の一環でしかない。

「おさしづ」には、「古きものを脱ぎ捨てたるだけのものや」（明治24年〈1891〉2月22日五年祭の当日御墓参りにつき）や「古着脱ぎ捨てて新たまるだけ」（明治26年〈1893〉6月12日飯降まさゑ事情）があるが、これらでも「老い」の説明にはなっていない。直接老いを説明する言葉は多くはないのである。

『稿本天理教教祖伝』では、明治14年（1881）の秀司の出直しに際して、「私は、何処へも行きません。魂は親に抱かれて居るで。古着を脱ぎ捨てたまでやで。」（p.152）と表現している。これは、「教祖様御伝」（『復元』33号、p.249）が典拠で、ほぼそのまま引用されている。

明治40年頃に作成された史料を引用しているとはいえ、くしくも秀司が出直した時に「古着」という言葉が登場するのは大変興味深い。なぜなら、寿命に関連する「おふでさき」のいくつかは秀司に関係するものだからである。

明治2年（1869）執筆の第一号63・64の、屋敷の掃除を促す「おふでさき」に、先の寿命について述べられている。おちゑとの関係を解消して小東家からまつゑを正妻として迎えるように急き込まれた時のものである。

明治8年（1875）6月からの十一号では、秀司夫婦に対して、寿命について次のような「おふでさき」が記されている。

ことしから七十ねんハふう〳〵とも
やまずよハらすくらす事なら　十一号59
それよりのたのしみなるハあるまいな
これをまことにたのしゆんでいよ　十一号60

このように見てくると、いまのところ歴史的な背景について不明だが、

しんぢつの心しだいのこのたすけ
やますしなずによハりなきよふ　三号99
このたすけ百十五才ぢよみよと
さだめつけたい神の一ぢよ　三号100

という、老いを考えるときに必ず引用される「おふでさき」も、秀司に対する言葉であった可能性もあるように思えてくる。

『稿本天理教教祖伝』では、秀司が出直した記述に、第十二号118・119の「おふでさき」が引用される（p.151）。その「おふでさき」の前の第十二号105には、前掲の十一号59の「おふでさき」と同じような「やますしなすによわらんの」という表現がある。じつは、第十二号105・106に関する昭和3年・昭和12年版の註釈には、

以下一二八迄は主として秀司先生御夫婦に仰せられたものである。尚第十一号五九、六〇参照。（昭和3年版）

と記され、前掲の十一号59・60と関係づけて説明されていた。この部分は戦後の改訂に伴って削除されてしまった。そのため、第十二号118～120の註釈との結びつきがよくわからなくなっているが、105・106のあとの、

これからハうそをゆうたらそのものが
うそになるのもこれがしよちか　十二号112

というような厳しい言葉の背景は、戦前まではかなり具体的に想定されていたのである。いずれにせよ、秀司夫婦への諭しと第三号100の「百十五才定命」は、もうすこし関係づけて考えてもよいように思われる。

明治24～31年の平均寿命は、男42.8歳、女44.3歳であり（総務省統計局『日本の長期統計系列』第二章人口・世帯　2-36男女、年齢別平均余命）、「おふでさき」「おさしづ」の時代は、老いて衰えていくことより、「百十五才」に近づくことが好ましく、老いそのものが問題になることは少なかったと思われる。

「おさしづ」でもその傾向はうかがえる。割書に年齢が記されている場合、70歳・80歳ともなると、ほぼすべて身上伺である。現在でも、老いは死や病と直結しているが、当時は老いそのものが問題となるわけではなく、死や病に付随するものとして考えられていたのだろう。

かつて大久保昭教氏は、老人問題に対して「その個人が悪いんだという考え方が、教内の一般的認識の中にある」（『みんなで一緒に考えよう3　老人問題』p.31）と指摘したことがあった。上記のような背景に目を向けてみると、こうした教内の認識は、誰もが経験するようになってきている老いを、死や病と同じように銘々のいんねんやほこりと関係づけて理解しようとしていることから生まれてきたといえそうである。

「おさしづ」における「古い」という言葉は、しばしば早くから教祖に仕えていた人びとのことをいい（辻井正和『おさしづ用語の新研究』）、とりわけ本席のことを指す例が多い。「年が寄ればくどい事を言う。理と理と親子なるこのやしきへ入り込めば、年取りた者を親と見立てるよう。この理を聞き取ってくれ。」（明治22年10月14日、本席身上／別釜、別風呂願）のような「おさしづ」は、血縁関係とは異なった関係が結ばれる教会生活において、若い者が老いた者にどう接していくかを示唆している言葉だろうと思う。